

明代杭州の年中行事

——田汝成『熙朝樂事』 訳注——

湯 谷 祐 三

〈解題〉

ここに訳出する『熙朝樂事』は、明代嘉靖年間の田汝成の編著で、明代の杭州における年中行事を記述したものである。これは元来、同人による『西湖遊覧志余』全二十六卷（以下、『志余』）の内、第二十卷に相当する。

著者の田汝成は錢塘の人で字は叔禾、生没年不詳なるも嘉靖五年（一五二六）の進士である。著作に『田叔禾集』十二卷の他、嘉靖二十六年（一五四七）自序の『西湖遊覧志』全二十四卷（以下、『遊覧志』）などがある。『遊覧志』及び『志余』は、前者が杭州とそれに隣接する西湖の風物を詳細に列記したものであるのに対し、後者は杭州と西湖に関する故事・逸事を分類詳記したもので、両者相俟って、中国有数の景勝地である杭州と西湖を詳細に知ることが出来る（いずれも上海古籍出版社より活字版刊行）。

今回、訳出の底本としたのは、「安永壬辰十二月、東都書肆、江戸浅草茅町二丁目、須原屋伊八」の刊記のある、安永元年（一七七二）刊の和刻本である（『和刻本漢籍随筆集』一一卷所収、一九八六年古典研究会刊）。その本文

は、原文に訓点と振仮名を施しており、その訓読者について、本文冒頭に「尾張大澤弘訳」、扉には「大澤南康先生訳」とある。また、巻頭に南宮大湫（一二七八～一七七八）による明和壬辰（安永元年、一七七二）の以下の序文がある。

題熙朝樂事首、子毅於學精勤人、十已百之余蓄書數篇、皆所手寫也。嘗投熙朝樂事一本示余、且請題一言焉。余咲曰、子令沐昭代文明之化、因及校此書、固雖於子土苴乎、足以知華俗、則反為我熙朝樂事已書名不亦有趣乎。於是乎書。明和壬辰之初夏、自書于牛草橋南積翠樓、南宮岳。

これらを勘案すると、大澤弘は尾張の人で、字は子毅、南康先生と呼ばれ、多くの本を自ら書写して蓄えており、『熙朝樂事』を南宮大叔に示して序を請うたようである。ただ大澤についてはそれ以上知るところはない。

大澤の付した片仮名の振仮名は本文の理解を大いに助けるものであるから、本訳ではそれらをすべて訳文に収めた。一部平仮名の振仮名は訳者において付したものである。なお、和刻本の本文には、『志余』の本文を一部省略した部分があるが（正月十五日条と二月一日条、及び除夕条以下）、今回の訳出では和刻本のままとした。また、和刻本の不審箇所については、『志余』を参照して訂した。

『熙朝樂事』は短編なるもよくまとまっており、明代杭州の年中行事を概観するには至便の書である。後注を施すに際しては、本文の理解に資する宋代以降の年中行事書、即ち、北宋汴京（現開封）の繁栄を描いた孟元老編『東京夢華錄』（巻六から巻十が年中行事、入矢義高・梅原郁両氏訳注、一九八三年岩波書店刊、後に一九九六年平凡社刊東洋文庫五九八所収）、南宋臨安（現杭州）の繁栄を描いた呉自牧編『夢粱錄』（巻一から巻六が年中行事、梅原郁氏訳注、二〇〇〇年平凡社刊東洋文庫六七四所収）、清代蘇州の年中行事書である顧禄編『清嘉錄』（中村喬氏訳注、

一九八八年平凡社刊東洋文庫四九一所収）などを主に参照した。

さらに近年、明代西湖の文物を描いた張岱編『西湖夢尋』が訳出され（佐野公治氏訳注、二〇一五年平凡社刊東洋文庫八六一所収）、筆者もまた、明代西湖の風物を味わった高濂による『四時幽賞』和刻本の訳出を試みた（本誌四七号～四八号、二〇一四年～二〇一五年）。これらによつて、明代の西湖や杭州の風物習俗を多角的に知ることが可能となりつつあり、今回の『熙朝樂事』の訳出もその一環をなすものである。

〈目次〉

1 【正月一日】—元旦の行事、2 【立春】—戯曲と春牛、3 【正月十五日】—上元節の灯籠、4 【二月一日・二日】—中和節、5 【二月十五日・十九日】—花朝節と観音会、6 【三月三日】—北極佑聖真君の誕生日、7 【清明】—清明節、8 【三月二十八日】—東岳齊天聖帝の誕生日、9 【立夏】—新茶を煮る、10 【四月八日】—釈迦仏の誕生日、11 【端午】—天中節、12 【六月六日】—避暑、13 【立秋】—立秋の行事、14 【七月七日】—乞巧、15 【七月十五日】—中元節、16 【八月十五日】—中秋、17 【觀潮】—錢塘江の觀潮、18 【九月九日】—重陽、19 【霜降】—霜降の行事、20 【十月一日・立冬】—墓參・臘八・下元節、21 【冬至】—冬至の行事、22 【十二月二十四日】—交年の行事、23 【除夕】—除夜の行事。

〈本文〉

熙朝樂事 明錢塘田汝成著・日本尾張大澤弘訳

1 【正月一日】¹⁾

正月朔日、官府では宮城を遠望して遙拝する。^{ヤカヤシキ}礼がおわるとすぐに盛装して衛門に出仕する。^{ヤクシヨ}その行き来には、

互いに慶賀のことはを交わす。民間では、^{ソナヘモノ}奠を祠堂に設け、次に家長を拜する。椒栢の酒をつくつて、親戚や隣里をもてなす。春餅を上供とする。^{クリノスミ}栗炭を堂中に焚く。これを「珮相」という。^{ヒカノカベ}青龍（の絵）を左壁に貼る。これを「行春」という。^{コマンノカラ}芝麻梗を簷頭に挿む。これを「節節高」という。^{エダガキ}栢枝を柿餅に簪け、大橋でこれを承ける。これを「百事大吉」という。この日より、^{ワカキヒトク}少年游治はあちらこちらへとかけまわり、呼び合い追いかけあつて、ころのままにすごす。歌吹を演習したり、^{タマツ}投擲・^{カケタ}買快・^{オウツチ}鬪丸・^{ホカウツカイ}翻牌・^{ケツリ}成賭・^{ウキヨハナシ}舞棍・^{チカラリ}蹴毬・^{シヨク}唱説・平話などをして、昼夜を論じない。これを「放魂」という。十八日になり、灯火を収めたあと、^{シヨク}学子は書物を考究し、^{サイクバ}工人は肆に帰る、農民や商人はおのおのその業を行う。これを「収魂」という。

2 【立春】^マ

立春の儀式は、^{ソトクルハ}附郭の両県が輪年に^{トシカハリ}通に担当する。^{マエビロ}仁和県の仙林寺、錢塘県の靈芝寺である。前期十日に、^{マツフギヤウ}県官は坊甲に役を当てて、^{マチシヨリ}什物を調べたとのえ、^{キウケンシ}優人・^{ヤラウ}戯子・小妓をすくりに集めさせる。そして^{ウチコナカマ}社夥を扮装させて、^{ケイコ}昭君出塞・^{キウタイ}学士登瀛・^{ツチウシ}張仙打彈・^{ヤツシスカタ}西施採蓮のたぐいを演じ、色々の変態で巧みを競い、華を争う。この教習を数日することを「演春」という。その当日になると、^{タイワン}郡守は僚属を引き連れて、前列の社夥を迎え、^{アト}殿に続く春牛を、男女が自由に見物して市街の道々がふさがる。（彼らは）^{ムキ}麦・^{コメ}米・^{マメ}豆を春牛に投げつける。その^{キヤウケン}優人の長は、^{ザモト}仮に冠と帯をつけて官吏の礼装をし、^{ホメコトハ}驢馬に騎乗して、^{セリフ}家来がこれを囲んで随従する。これを「街道士」という。^{マチシヨ}官府や^{レキ}豪門の前を過ぎるときに、おのおのに^{ハタカ}贊揚の致語があり、^{マチハンシヤウ}利市を析る。^{ツ、レキタルフヤクモ}檻樓猥漢がその^{キヤウレツ}節級の邪魔をしたりすると、^{サレロ}褌にしてこれを杖つ。また、^{ヒノウハン}誹浪や^{ウヤク}判語があるが、あえて取り合わない。府中に至り^{サカ}拳燕して、牛を鞭打ってこれを碎く。そして彩色された鞭と土牛とを上^{ウヤク}官や^{レキ}郷達に分ち送る。民間の婦女はおのおの春幡・^{イトハタ}春勝・^{イトハナ}鏤金・^{キンシ}簇綵で燕や蝶の類をつくり親戚に贈る。これを^{イナモシ}釵頭に^{カウカインハン}結び付けて酒を飲む。^{イトキリ}縷切・^{ウドン}粉皮雑や

七種の生業を筵間に供える。けだし、昔の人が行つたという辛盤の遺意であろう。

3 【正月十五日】³

正月十五日は上元節である。その前後に五夜にわたり灯籠がつけられる。伝えられるところによると、宋代にはただ三夜であったが、出資者（錢主）が産物を納め、資金を提供して（灯籠を）買いととのえ、二夜を追加したという。これに先だつて、十二月から立春の前にかけて、寿安坊から衆安橋にかけて（市が開かれ）これを「灯市」という。各色華灯が売られる。人物を象っているものは、老子と美人、鍾馗が鬼を捕らえる、月明仙人が妓女を教化する、劉海仙人が蟾と戯れる、などのたぐいである。花や草ならば、梔子・葡萄・楊桃・柿・橘のたぐいである。禽獸や虫なら、鹿・鶴・魚・蝦、走る馬などである。奇巧としては、瑠璃毬・雲花屏・水晶簾・滿眼羅・玻璃瓶のたぐいである。豪家の富室には、料綵・魚鮑・綵珠・明角樓・画羊皮・流蘇宝帯などがある。それらの品目は年ごとに異なるから枚挙にいとまがない。好事家は藏頭の詩句を（灯籠に）書き付け、人が商搢に任せる。これを「猜灯」という。あるいは神廟に祭賽をする。神祠社には夥しく、鰲山・台閣・戯劇・滾灯・煙火などが出て、通衢・委巷を問わず、星をちりばめ、珠を懸けたように連なり、その明ることは昼間のようである。徹旦喧噪をきわめる。食べ物には、糖粽・粉团・荷梗・字婁・瓜子・諸品の果蔬がある。灯籠をかがげ、交易では銀錢の真偽を識別して織毫だまされない。家々の婦女は、帚姑・針姑・葦姑・簪箕姑などを招き、一年の吉凶を占つてもらう。郷間では新蚕の祭りがある。世間の人は、上元をもつて天官賜福の日とする。また、經典を暗誦して持斎し、葷酒を用いないものもある。

4 【二月一日・二日】⁴

二月朔日は唐宋代にはこれを中和節といった。今は行われないが、民間ではなお、青い囊に五穀や瓜果の種を盛り入れて互いに贈りあう。これを「献生子」という。この日より城中の子女は、城郭を出て探青に出かけ、墓を掃除して、奠ソナエモノを設けるものもいる。西湖の遊舫アソビフネの賃フナ賃は日増しに上がる。二日に子女は蓬の葉を頭にいただく。こ
とわぎに、蓬が開いたときの先日の草アサツユを頭に載せると、春に年を取らないという。

5 【二月十五日・十九日】⁵

二月十五日は花朝節である。けだし、花の朝、月の夕べと世間では恒言コチクセのようにいう。二月・八月の両月は春と秋のそれぞれ真ん中の月であるから、二月の半ばを「花朝」といい、八月の半ばを「月夕」という。この日は宋代には撲蝶テウクトウの遊戯があつたが今は行われない。寺院では涅槃会が開かれ、孔雀経が談義される。拈香サケイのものが群がり集まるのは、今にいたつてなおその遺風である。十九日は上天竺で観音会が開かれる。傾城マルノウチや子女はみな参詣する。この時に馬勝うまかつや園丁が競つて名花を荷擔ニチャイテヨヒウル叫囂ミヤコノサチ。その音は律呂になつてゐる。

黄子常の売花声詞に云う、「人は明け方の天街ミヤコノサチを行き、色々な花を籠に入れて担う。それが箱にあふれ、花が浮き、蕊がただよう。美しい樓閣では（人が）寝たり起きたりして、透き通つた水に向かい合つてゐる。新腔メウシキフを一つ聞くたびに起きあがる。赤いよ、白いよと声を張り上げる。蜂の子に（その声が）届いたか、どうか。（湖の）東西に分かれて、余韻がやわらかく残る。（みな）争つて迎えて（花を）買い、急いで、高く結んだ美しい髪に挿してみる。春の楽しみを増し、紛々たる香りが簾中を満たす。」

喬夢符がこれに和して歌う、「明け方を待たずに園丁が叫ぶ、若々しい紅だよ、あだな紫だよと。工夫をこらして、枝を調べ、蕊を連ねる。歌を唄つて歩いたり、立ち止まつては、新鮮な水をかけて洗い流す。香りが風にまき上がる

につれて、町の簾も巻き上がる。どんなに奥まった街路であっても、（この香りに触れて）開かない門があるうか。たちまちに人々を目覚めさせ、春の夢の美しさを求めさせる。窓を通して、あるいは楼閣を通り抜けて、なんとかこれを買求める。花を（買うのを）惜しむような人がどこにしようか。」

6 【三月三日】⁶

三月三日は、俗に北極佑聖真君タシヤマの生辰の日と伝えられる。佑聖観中では崇醮マツリ事を修して、子女が参詣する。また人家でもお供え物をして祀り、水を酌み花を献じるものもいる。この日、道観では「雀竿ササノハシ」の戲がある。その法は、長い竿を庭に立てる。高さは三丈ばかりである。一人がそれに攀縁トリヅキて上り、其顛ササノハシで舞踏をする。ぐるぐる回り、上がり下りし、鶴子翻身・金鶏独立・鍾馗抹額・玉兔搗薬のたぐいの芸をして、その身体の変化は多様で、見物人は目眩イラミり心を驚かし、汗を流して背中を濡らす。この技を行うものは、蝶拍テフや鴉翻ハウチのような遽遽カラス然トウをしても泰然自若ハヤフサとしている。この日、男女は薺花ナツナを頭につける。ことわざに、薺花を頭に載せると、桃李はその繁華を差じるといふ。

7 【清明】⁷

清明は、冬至より数えて百五日目がその節日である。その前の両日はこれを「寒日」という。民間では柳を挿して簪をいっばいにする。その青蒨アヲキナな様子は素晴らしい。男女もまたこれを頭に載せる。ことわざに、清明に柳を頭に載せないと、紅顔ベニカウハセは皓首シロアキタマになるといふ。この日は城中を挙げて墓所に登るので、南北両山の間で車馬が闐集シシユする。酒尊サカトルや食饗ウリコが山家や村店に置かれ、享餽マツリノソナヘモノが遊客を迎える。（遊客は）幕を張って草を敷き、舫を並べて波に揺られる。日が暮れても帰ることを忘れる。蘇堤を一望すれば、桃や柳の緑陰が細やかで、その赤や緑が入り混じる。

走索・驃騎・飛錢・拋鉞・踢木・吞刀・吐火・躍圈・觔斗・舞盤、及び、色々な鳥や虫の遊びなどが
 いり乱れ、群がり集まる。外方・優妓などの錢を求めるものが、湖上にも陸上にも出ていて、接踵・承応
 である。また、香茶や細果などの酒席で求められるものを、買売趕趁がいるし、綵妝・傀儡・蓮船・
 戰馬・錫笙・鼗鼓・瑣碎戲具などで兒童の氣持ちをくすぐるものも、在在で市をなしている。この夜、民家で
 は「清明嫁九娘、一去不還鄉」（清明節に九女が嫁いだ。いったん嫁いだら決して実家に戻らない）（と書かれたお
 札）を、柱や壁の間に貼り付ける。何故かという、こうすれば、夏に虫が撲灯という煩わしさがなくなるとい
 う。僧侶や道士は楊桐の葉をとって飯を染める。これを「青精飯」といい、施主に贈る。

8 【三月二十八日】⁸

三月二十八日は、俗に東岳齊天聖帝の誕生日であると伝えられている。杭州には行宮がおよそ五ヶ所あるが、呉
 山の上にあるものが最も壮麗である。子女は答賽の拈香をしたり、花や果物を奠献したりする。あるいは読
 経して長寿を祈り、首かせや鎖で縛られて罪に服する（所作をする）。鐘や太鼓の法音がかまびすしく鳴り響いて一
 日が終わる。

9 【立夏】⁹

立夏の日は民間では新茶を煮る。それに諸色の細果を取り合わせて親戚や比鄰に贈る。これを「七家茶」と
 いう。富家では競侈、果にはみな彫刻が施してあり、金箔で飾っている。これを「香湯名日」といい、茉莉・林
 檣・薔薇・桂蕊・丁檀・蘇香などを哥窯や汝窯の磁器に盛りつける。これでわずかに、お茶をひと啜りするだけだ。

10 【四月八日】¹⁰

四月八日は俗に釈迦仏の誕生日と伝えられている。僧尼はそれぞれ「龍華会」^{カンテウエ}を催す。お盆に銅仏を置いて、それを糖水^{サトウミツ}にひたし、花の屋根で覆う。(そして)鑢鉞や太鼓を鳴らして送迎する。富家では小杓^{コビシヤク}でもって仏像に甘い水をそそぎ、偈誦を唱えて、財物をお布施する。(次のような)高峯和尚の偈文がある。「その呱声^{オウゴヘ}はいまだに絶えておらぬから尊というのだ。三千世界の暗愚をかき乱してしまつたわい。悪い水でも一年に一度そそいでみると、彼の雪に臥した苦しみがよくわかつて、その恩に報いようと思うものだ。」

11 【端午】¹¹

端午は天中節である。民間では黍稷^{キヒテウコメ}を包んで粽^{チマキ}にして、それを束ねるのに五色の綵絲を用いる。また、菖蒲や通草で天師が馭虎^{トウニフリタルカタチ}像を盆の中に作つて、周圍を五色の蒲の糸で囲む。あるいは、皮金^{アカミノキン}に剪を入れて色々な虫を作り、その上に鋪くに、葵榴や艾葉で華麗を攢簇^{トリアツメ}、あるいは、綵絨^{イロイト}や雑金線^{キンシマシリノイト}を経筒^{キヤウツツ}や符袋^{フダフクロ}に纏結^{マトヒツケ}て、互いに相饋遺^{フアリモノニス}。僧侶や道士は経筒輪子^{キヤツツ・マモリ}や辟惡靈符^{アブヨケノマモリ}を檀越に贈る。医者も香囊・雄黃・烏髮・油香などを、いつも行き来するところに贈る。家々では葵・榴・蒲・艾を買つてこれを堂の中に植えて、五色の花紙で飾る。(それには)画の虎やさそり、あるいは天師の像が貼つてある。また「五月五日天中節、赤口白舌尽消滅」(五月五日の天中節には、赤口・白舌などはすべて消滅する)と硃書^{シュカキ}して、これを柱に掲げる。あるいは百草を摘んで薬品を作る。蝦蟇^{ヘビマムシ}を捕まえて蟾酥^{カマノアブラ}を取り、(それで)「儀方」の二字を書く。(これを)柱に逆さに貼つておくと、蛇虺^{ヘビマムシ}の害をのがれるという。

12 【六月六日】¹²

六月六日は宋代には会を顕応観で催し、それで暑さを避けていたが、今では会は廢れて顕応観もなくなった。この日より、西湖に遊ぶものの多くが夜間に出かけ、湖心に停泊、月飲て達旦。市中では銅のさかづきを敲て、水や雪を売るものが衆く、あちこちで鏗聒い。この日、郷人は、猫や犬をかついで、河の中で水浴びをする。そのやり方は泥淤に汨没るので、踉蹌就斃者がいる。（何故そんなことをするのか）その取義は竟よくわからない。

13 【立秋】¹³

立秋の日に男女は咸、楸葉を頭につけて季節の移ろいに合わせる。または石楠紅葉を剪で切つて花卉を作り、髻の辺りに挿挿。あるいは秋の水で赤小豆七枚を吞む。

14 【七月七日】¹⁴

民間では盛んに瓜、果や酒肴を庭心や楼台の上に設けて、牛女が天の河を渡ることを話題にする。婦人は月に向かつて穿針、これを「乞巧」という。あるいは小盒に蜘蛛を盛て、次早にその結網の疎密を観察して、裁縫の上達の多寡を占う。市中では土や木で子供の像を雕塑て、色糸で作った服を着せて売り出す。これを「摩喉羅」という。

15 【七月十五日】¹⁵

七月十五日は俗に中元節と伝えられる。地官が（その罪人の）赦罪之辰である。民間では多く持斎・誦經して奠を祖考に薦め、孤独の霊を救い判斛（先祖供養）をする。屠門（肉市場）は商いを停止する。僧院では盂蘭盆

会を行う。灯火を西湖や塩上河中に放ハナ。これを照ヤシチヲラス冥ミョウという。役所でも郡厲ムエンホウカイ邑厲イホウカイ壇を祭る。

張伯雨の西湖放灯詩は次のようにいう。「ともに灯火の乱れ光る中に美しい舟を浮かべる。いつのまにか風や露が青い空をうるおしていた。今、池の底に錦が連なり、この夕べ、いかだの舳先に星がかかった。爛々とかがやく様子は、金の蓮が夜の松明を分け、雲母がむなく秋屏閣を隔てるようだ。かえって、牛渚での（袁宏と謝尚との）交情の甚だしいことが憐れまれる。ねんごろに明るく照らして多くの亡霊を走らせようと思うのだ。」

劉邦彦の詩は次のようにいう。「金の蓮の葉が多く流れの中をただよっている。潘妃が夜遊びに出てきたのかと疑われた。魚や龍がその岩穴から出てきたら、まずこれを射る。光が揺れて雁が中州に乱れ飛ぶのが見える。波濤をわたるには必ずしも銀河を通ることはない。月を追って、美しく飾った舟が近づくのをめぐる。幼い頃、舟を浮かべたことを思い出した。満身に風や露を受けて、一人楼閣にもたれるのだ。」

16 【八月十五日】¹⁶

八月十五日夜は「中秋」という。民間では月餅を互いに贈り、団円の義にちなむ。この夕べ、家々では賞月ツキミの燕サカギリをする。あるいは、楹サカシを携えて湖船で沿遊コキマツ、徹曉ヨモエカラ、蘇堤の上で聯袂ソナヘモ、踏歌ウタイアリ。白日ヒルに異なることがない。

17 【観潮】¹⁷

郡の人々が観潮するのは八月十一日から始めて、十八日に到り最高潮となる。それは、宋代にはこの日に水軍を教オウセツルニ閱ミよって、城中を挙げて見物に行ったことによる。（それで）今でもなお、十八日を（観潮の日と）いうのである。特にこの日の江湖が大きいというわけではない。この日、郡守は牲醴ソナヘモノを用意して潮神を致祭サイシ。郡の男女が雲集マツルし、倩幕ヨキマクを飢カリ、羅綺ヨリモノを次ナラヘ、塞塗ミチサフサク。上流から下流にかけて十余里の間には、わずかなすきまもない（ほど混み合っ

ている）。潮が海門ミヅカドより上がってくるのが見えると、涸見フコミ數十人が綵旗イロハタを手にとり、画傘エカラサを立てながら、水波を踏み、波濤をひるがえして騰躍トウヨク。（その姿は）百変サマクであり、それで誇材ケイマンズ能る。豪民フケンシヤや富客カホキヤは争って賞材物ホウヒラヤル。その時に、優人キヤウケンシ・百戯サマクノフヒ・擊毬マリウチ・関撲スマヒ・魚鼓タイコウチ・彈詞セリフなどの声音コイロが鼎の沸くようである。けだし、人々は潮を見物するの藉カコツケテ、名目としてるのであって、往々にして随意酣樂キマ、ニタノミニフケルノミ耳である。

瞿宗吉の看潮詞には次のように云う。

「風流なつどいに出門こうとすると門前に翠の柳が垂れている。海鮮橋の上の赤い欄干にもたれかかる。道行く人が山の前の石を指さす。あれには先朝の皇帝様の詩が刻んであるという。

城郭を出てきた見物の客はお互いに誘い合うまでもない。みんな道で出合つて潮を見に行くといい合う。今年の秋もどうして暑さが和らごうか。陽光を浴びて、絵が描かれた扇を忙しげに揺らす。

最初の潮波が来たときには海に出るのが遅かった。司封祠の下に多くの人が立っている。すぐに樂器が鳴り響いて天にとどろく。河の中で波に乘ろうとする連中があわただしく出てゆく。

いろいろで爛ラナを付けた酒を人に勧めて味見をさせる。紫の蟹は肥えていて、橘の花が香る。店の女も普通の俗客でないことを知っている。召使いが詩の原稿を入れるふくろを携えているからだ。

河口の土手は道がはるかに分かれている。酔って帰りに着いたところには太陽は西に傾いた。不思議なのはどこからか芳香が漂い続けていることだ。なんだ、頭に金木犀の花を挿していたよ。

門を開けて小宅に入る。金猊キンギ（金の獅子形の香炉）がしなやかに香煙を浮かべている。家人が笑って言った、どうしてこんなにお帰りが遅いの？。すでに中秋の名月を觀賞する座が設けられていた。」

18 【九月九日】¹⁸

重陽九月九日には、民間では、栗粉クリコチを糜カユにして蒸して、蒸し菓子を作り、肉縷イロハタを敷いて、綵旗サイハタを飾って親戚に贈る。登高して宴会を催し飲食する人は、必ず菊を簪にさして、萸ユを（孟に）浮かべる。これは古人の遺風である。また、蘇子シツを梅酒ムネズに微清スシヒタシ、蔗霜シロサトウ・梨ナシ・橙ダイダイ・玉榴ザクロなどの小顆マゼに雜和マゼする。これを「春蘭秋菊」という。

19 【霜降】¹⁹

霜降の日に、役所では旗纛フハタの神を祭る。そして、軍器ナラベを張列ナラベて、金鼓カネツイコを鳴らして先導し、市街を巡行して迎賽レイサイをする。これを揚兵という。旗幟キョク・刀戟タウキョク・弓矢キウシ・斧鉞ボ・盔甲コウカフのたぐいは、それぞれ精緻で輝く。緇騎ハヤムツが数十騎いて、飛轡ツノリして行き交う。逞弄解数キョクノクノケサウ（曲馬の演目）は、「双燕・綽水の神」・「二鬼が珠を争う」・「肚を隔てて針を穿つ」・「枯松の倒挂」・「魁星の踢斗」・「夜叉の探海」・「八蠻進宝」・「四女呈妖」・「六臂哪咤」・「二仙伝道」・「圯橋進履」・「玉女穿針」・「擔水救火」・「踏梯望月」のたぐいである。窮態極変サマヘケイツクシは彈サマヘは名付けがたい。騰躍トトリアカリして上下して、鞍と鐙の間を離れることがないのは、猿猱サルが木にしがみついているようだ。

20 【十月一日・立冬】²⁰

十月朔日は民間では祖考センソウをお祭りしてお供えする。また、掃松ハカノソウ・澆墓ソウの礼を行うものもある。十月八日は白米を胡桃ミツノツカサ・榛ミツノツカサ・松乳菌ミツノツカサ・栗などと和えて粥を作る。これを膈八粥という。十月十五日は下元節である。俗に水宦ミツノツカサの解厄ハライの時期と言い伝える。持斎し誦経するものもある。立冬の日は、各色の香草や菊花・金銀花キンギョウを煎湯クスイユにして沐浴ユアマする。これを掃疥ソウハライという。

21 【冬至】^{*21}

冬至は、これをツゲルシヤウクハツ 歳ヤクシヨ という。官府や民間でそれぞれ慶賀しあうことは、まったく元日の儀礼のようである。これは呉中でもっとも盛んである。肥冬・瘦年コヘクトウジ ヤセタシヤウクワツ という言い伝えがある。神様に供える餅をついて蒸し菓子に作り、先祖をお祀りする。婦女は鞋襪タビを目上の人に差し上げる。これも古人の履長の意味である。

22 【十二月二十四日】^{*22}

十二月二十四日は、これを交年トシノカワリという。民間では灶カマドをお祀りする。膠牙餠・糯米・花糖・豆粉団などをお供え物とする。巧者コウジキは塗抹ヌリツケテ、形装カタサマを変、鬼と成つて判叫サケヒ、跳、驅儺ユニヤライをして報酬を求める。家々では、それぞれ桃符タウフ、門神・春帖・鍾馗・福祿・虎頭・和合などの色々な図を部屋ハコの壁に粘貼ネリツケ、蒼木・貫衆・辟瘟丹・栢枝・綵花などを買つて、除夜の用意とする。その頃より街坊ミナトでは簫や太鼓の音の鏗鏘ヒビキが絶えない。僧・道ドウは交年疏トウセンや仙朮湯カウセンを作り、檀越に贈る。医者も屠蘇袋や同心結、色々な湯剤をいつも行き来するところに贈る。

23 【除夕】^{*23}

除夜には、家々では先および百神を祀る。松柴ツミチを架、大きくして、火をつけてこれを焚く。これを「粗盆シムバシ」という。煙と焰テラが天を燭して、爛々たることは霞の布のようである。爆竹や鼓吹サギチヤウ タイコフエの音があちこちから耳に響いてくる。家庭では挙燕サカモリスル。年長者も幼年者もすべて集まる。兒女は終夜ヨモスカラ、博戯・藏鉤ハロウチ スコロクをする。これを「守歳」という。床トコノシタニに灯トモシビを然す。これを「照虚耗」という。小豆で粥を作り、犬猫にもこれを食べさせる。更深に人々は静まって、灶カマドを祈り、方を請い（方角を占い？）、鏡を携えて門を出る。市中の人の無意の言葉を聞き取つて、来年の休咎ヨシアシを占う。この日、役所は閉じられていてまったく僉押トリアツカハス。新年の正月三日になって初めて開く。色々な商店も商売をやめて、

行き来して酒をたらふく飲む。けだし、杭州の人がぜいたくで派手なことは、貧富にかかわらず、誰もが競って色々なものを買って目出度い日を祝う。門戸を光飾^{ミカキカサリ}、婦女の衣服・釵環のたぐいを磨きかがやかせ、更造^{カヘリツクリテ}、一新する。みな古き都の遺風なのである。

熙朝樂事大尾、大澤丹治訳。

安永壬辰十二月、東都書肆、江戸浅草茅町二丁目、須原屋伊八。

*1 民間では……『夢梁録』卷一「正月」の条は、北宋の『東京夢華録』卷六「正月」を踏襲したものとされており、明代杭州の民間の正月習俗を記録したものととして、本書の記事は貴重である。春餅——これは、小麦粉を薄く丸くのばして焼いた皮に細切りにした野菜や肉を醬^{みそ}と共に包んで食べるものか。こうした形式の春餅は宋代以降で、唐から宋初にかけては饅頭(蒸餅)の類が用いられたという(『清嘉録』四八頁)。

*2 仁和県——杭州城内の芳潤橋を東西に結ぶ線の北が仁和県、南が錢塘県である。昭君出塞・学士登瀛^{キウアイ}・張仙打彈・西施採蓮——昭君出塞は王昭君の哀話に取材した戯曲であろう。明の雜劇に陳与郊作「昭君出塞」がある由。学士とは唐の太宗の十八学士をいう。その一員となることを「登瀛州」といった。張仙は五代蜀の青城山で成道した人。修行中一老人から彈弓と鉄彈を授かったといい、宋代では子授けの神とされていた。西施は春秋時代、越より呉王夫差に献じられた美女。明の梁辰魚が西施に材を取った戯曲「浣紗記」の中に採蓮の遊びの場面がある。以上、四種の戯曲は、『清嘉録』「行春」の項にも同様に出ている。辛盤——五辛盤の略。五辛をまぜて盤に盛ったもの。元旦に食すれば五臓の氣を通じ健康を保つという。春牛——この土の牛をめぐる習俗については、これを迎え巡行する儀礼(行春)と、これを打ち、碎く儀礼(打春)の大きく二つの要素がある。行春のおり、蘇州では幸運が得られるとして見物人が争って牛を撫でるという(『清嘉録』「行春」)。また本文にあるような、牛に米・麦・豆などを投げつける行為は蘇州でも見られる(『清嘉録』「打春」)。これには厄払いの意味があ

るという。土牛を鞭打つのは春耕の模擬儀礼で、これを碎くのは、土や牛の生命力を解放し、生産力を高めるのだという。

*3 出資者—原文「錢主」。灯市—同様のものは蘇州でも見られる。老子と美人、……以下に記される四つの題目のうち、鍾馗のものの以外の三つは、『清嘉録』「灯市」にも出る。月明仙人は未詳。劉海仙人は、劉海蟾、名は操、五代の時に燕王劉守光に仕えて宰相となり、のち呂洞賓に学んで仙道を得た人。道号を海蟾子という。また遼に仕えて宰相となった人ともいう。猪灯—『武林旧事』卷二に「歲頭・隱語」とあり、南宋時代既にこの習俗があったことがわかる。また、蘇州にもこの習俗があった（『清嘉録』「打灯謎」）。天官賜福—天官賜福、旧暦正月十五日の上元節をいう。天官下降の日。

*4 二月朔日はこれを「献生子」という—ここまでは『夢梁録』卷一と同文である。中和節—旧暦二月一日、群臣に酒饌を賜う行事。唐德宗貞元五年（七八九）より始まる。それ以前は正月晦日に行われたという。

*5 花朝節—旧暦二月十二日、又は十五日をいい、花を愛でる日である。この習俗が明らかに見られるのは宋代からという。蘇州など呉地方では十二日とする。黄子常—不詳。喬夢符—喬吉、字は夢符、一二八〇—一三四五。山西太原の人で杭州に寓居する。雜劇『揚州夢』『兩世姻緣』『金錢記』などの作者。

*6 北極佑聖真君—道教で北極星を神格化した呼称。佑聖觀—北極佑聖真君を祀る道觀。『西湖遊覽志』卷一七（二二八頁）参照。男女は薺花（ナツナ）を頭につける—この習俗については、『清嘉録』「野菜花」の項にも記載があり、その目的として「目が清らかになるよう祈る」とされている。

*7 清明—二十四節気の一つ。冬至から百五日目で三月初頭、いまの四月上旬に相当する。南北朝から宋元までは冬至から百七日目としており、明代に百五日に戻ったという。寒日—寒食のことであろう。これは冬至から百五日のことで、風雨が激しいとして火の使用を禁じて冷食した習俗。寒食があげて清明になるという順番である。民間では柳を挿して……寒食の日、悪鬼を払うために門戸に柳を挿す習俗は五代末頃より見られるという（『清嘉録』「挿楊柳」注）。本文のように頭に挿すのもそれに類似するものか。城中を挙げて墓所に登る—寒食の日に墓参する習慣は、『旧唐書』玄宗紀開元二十年の詔に見られ、それ以前より盛んになっていたことがわかる。

*8 東岳齊天聖帝—泰山の神。北宋の真宗は大中祥符元年（一〇〇八）に泰山を天齊王に封じ、仁聖と号し、帝と称せしめたという（『夢梁録』卷二・「清嘉録」「東嶽生日」参照）。行宮—皇帝行幸の時の仮の宮居、行在所をいうが、この場合は、杭州における東岳齊天聖帝の五つの廟所を指す。杭州城の東西南北の四箇所に、中央にあたる呉山の廟所を加えた五箇所であ

る。

*9 七家茶―『清嘉録』『注夏』では、夏負け対策のため、近隣の家々から茶葉を集めて飲むことを七家茶としている。本文の奢侈な風俗はその変化したものであろう。哥窯や汝窯の磁器（宋代までの名窯として、官窯・哥窯・汝窯・定窯などが知られる。哥窯は黒褐色の胎土で白っぽく発色する青磁で多くの貫入が特徴である。官窯に倣ったものでその産地は龍泉窯との関係が想定される。汝窯は北宋青磁の名品を産出した窯業地で、近年河南省清涼寺にその窯跡が確認された。完品としては世界で数十点の遺品が確認されている。）

*10 龍華会―我が国では俗に「花まつり」などという。「カンテウエ」と訓むのは、釈迦の誕生時に天から甘露が降ったことにちなんで、誕生釈迦像に甘茶をそそぐ（灌頂する）ことによるもの。なお、この日、西湖では小舟から亀や魚・貝などを放す「放生会」も行われていた（『武林旧事』巻三）。花の屋根―原文「花亭」。釈迦の誕生を祝って、天から蓮華の花が舞い落ちたことを表現するものであろう。こうした作り物は、例えば江戸期の尾張熱田などで「花の塔」と称されるものとも類似する。高峯和尚―元代の禪僧高峰原妙（一二三八―九五）であろう。天目山に住した。その門下より中峰明本などが出た。

*11 端午―端午は唐以来「端午」と表記するが端五（はじめの五日）が正しいという。この段の記述は『夢梁録』『五月』と類似し、それを節略したような形である。五月は古くより悪月と呼ばれ、暑湿による害悪を避ける行為が行事化されている（『清嘉録』『端五』も参照）。天師が馱虎トウフカ像―天師とは、後漢の五斗米道で知られる張道陵のこと。張天師の絵を厄よけにしたことは、『燕京歲時記』の「天師符」にも見られる。ここでは菖蒲などの草で、天師が虎にまたがった姿を細工するのであろう（『清嘉録』『健人』も参照）。色々な虫―原文「百虫」。人に害をなす蛇・ムカデなどの、五毒と言われる五種類の害虫。これを紙で細工して門に貼り、厄よけとする。天中節―五月五日の午の時を天中と称し、それを端午と同様に節名としたもの。赤口白舌―舌先三寸、三百代言的悪事を働く悪神（『武林旧事』巻三「端午」参照）。百草―『本草』雑草に、「五月五日、百種の草を採り、陰乾して焼灰し、石灰を和して団となす」とある。

*12 顕応観―『咸淳臨安志』巻一三によれば、東漢の崔瑗（子玉）を祀る道観。清波門の付近にあった。氷や雪を売るものが衆く……蘇州においても旧暦六月に「地元の水を担って売り歩」き、その中には各種の果物が冷やしてあったという（『清嘉録』『凉水』）。猫や犬をかついで、河の中で水浴びをする―六月六日の犬猫の水浴については、明代の『万曆野

獲編」卷二四に見え、『清嘉録』「狗禰浴」にも記載がある。もとは除災を目的とした人間の沐浴であつたものが、犬猫のそれに變化したようである。

*13 楸葉を頭につけて……同様の習俗は、『東京夢華録』卷八「立秋」に「立秋の日には、町じゅう楸の葉を売る。女子供たちはみな、模様を切り抜いたりボンを頭につける」とある。また、『武林旧事』卷三「乞巧」・『夢梁録』卷四「七月附立秋」にも見える。「楸」について、本文には「キサ、ゲ」と振仮名をふり、『東京夢華録』の訳文には「ひさぎ」と振仮名をふっている。一般の辞書では、「ひさぎ」の項に「キササゲまたはアカメガシワのこと」とある（『広辞苑』）。ただし、キササゲとアカメガシワは別種の植物である。

*14 小盒に蜘蛛を盛て……『東京夢華録』卷八「七夕」にも同様の記事がある。摩喉羅——土などで作つた童子の人形。『夢梁録』卷四「七夕」では、「摩喝楽」・「摩喉羅孩女」と表記される。もとは梵語の *nāhoraga* という神で人身蛇頭であつたが、中国では眉目秀麗な男児の像となつたという（『東京夢華録』卷八「七夕」参照）。

*15 中元節——道教で正月十五日を上元、七月十五日を中元、十月十五日を下元とする。唐代の『芸文類聚』卷四に引く『道経』には、「七月十五日の中元の日、地官校勾して、人間を搜選し、善惡を分別す」とある。一方、経の読誦により餓鬼が衆苦を免れると、仏教の盂蘭盆会と類似した説も記している。よつて道教においても、祖先を供養する祭が、仏教の盂蘭盆とは別に存在したことがわかる。郡厲邑厲壇——『東京夢華録』卷八「中元節」に「無縁仏済度の法事がとり行われる」とあり、『清嘉録』「七月半」（七月十五日）の項に、「官府はこの日にも郡厲壇で祭を営み云々」とあり、官祭として無縁の亡魂が祭られたことがわかる。こうした法会は明代には清明節・中元節・十月朔の三回行われたようである。傍訓の「ムエンホウカイ」は、「無縁法界」であろう。張伯雨——一二七七—一三四八。元代の人。張雨、字は伯雨、錢塘の人。二十歳頃から家を捨てて名山に遊び、三十歳で茅山に入り、道士となる。六十歳の時、道服を捨て、儒者となり、江浙一带を周遊して各地の文人と詩文のやりとりをした。倪瓚はその詩文書画を本朝道品第一と高く評価した。秋屏閣——原文「秋屏」。唐代より南昌府の德勝門外に所在した北蘭寺の秋屏閣のことか（『西江志』卷一一）。唐宋より詩中に詠み込まれるのが散見される。牛渚——南京の南にある渚の名という。晋の袁宏が月夜に舟を牛渚に浮かべて詩を吟じ、謝尚と会して大いに名声を博した故事がある（『晋書』袁宏伝、『蒙求』袁宏泊渚）。劉邦彥——錢塘の人で賓山と号す。詩書をよくし、成化年間に隱居して仕えず、湖山に遊んだという。西湖にまつわる詩を多く詠んでいる（『西湖遊覽志余』卷一三、二四七頁）。潘妃——南朝齊の東昏侯の

妃。神仙・永寿・玉寿の三殿を造り奢侈を極めた。

*16 中秋―二月十五日の花朝節に対するのが八月十五日の中秋節で、唐代以後両方をあわせて「花朝月夕」という言葉が生まれたという。民間では月餅を互いに贈り――『東京夢華録』巻八「中秋」や『夢梁録』巻四「中秋」には月餅の贈答は記されていないが、『清嘉録』巻八「月餅」にはそれが記されている。中秋に月餅を贈答しあうことは元明代以降の習俗である。

*17 観潮―钱塘江の満潮時のダイナミックな逆流を楽しむ行事。『武林旧事』巻三「観潮」・『夢梁録』巻四「観潮」参照。瞿宗吉―一三四七―一四三三。瞿佑、字は宗吉、钱塘の人。『剪灯新话』等の著書多数。秋吉久紀夫氏「明代初期の文人瞿佑考」参照。海鮮橋―宋代の宮城の内にあり、その石に魚や蝦・花草などの形があつたという（『明一統志』巻三八）。司封祠―未詳。

*18 重陽九月九日―元来、三月上巳と対になった厄払いの節日であつたが、次第に九が重なる嘉日としての観念が強まつたという（『清嘉録』巻九「重陽信」注）。萸を（盃に）浮かべる―「萸」は「茱萸」のことで、ミカン科の小高木ゴシユ。赤い小粒の実に異臭があり、厄よけに結びつくという（『続齊諧記』汝南桓景伝、『歳時広記』巻三四等）。

*19 霜降―旧暦九月の中（ちゅう）。太陽暦の十月二十三日―二十四日にあたる。旗纛の神―『清嘉録』巻九「旗纛信爆」によれば、これは軍旗の神を祭る儀礼で、霜降の日に兵器を連ねた行列が銅鑼や太鼓に先導されて、練兵場にある旗纛廟に参上するというものである。

*20 掃松澆墓―我が国の春秋の彼岸行事と同様に、中国では清明節と十月一日に墓参を行う。杭州における十月の墓参については、『夢梁録』巻六「十月」、『清嘉録』巻十「十月朝」にもある。臘八粥―本文は「臘八」であるが、「臘八」のことである。臘八とは臘月八日、つまり、十二月八日をいい、この日は釈迦が悟りを開いた日として、仏寺では成道会を開く。そこで供されるのが臘八粥である。本文が、十月八日に食する粥を臘八粥と称するのは不審。十月十五日は下元節である――下元節に厄払いをすることについては、『夢梁録』巻六「立冬」にもある。金銀花―振仮名「ニントウ」は忍冬、すなわちスイカズラのこと、これを薬用酒としたものが忍冬酒である。

*21 まったく元日の儀礼のようである―冬至の日を正月と同様に、盛大に慶祝することについては、『東京夢華録』巻十「冬至」・『夢梁録』巻十一「冬至大如年」に見える。肥冬・瘦年―これは北宋時代から見られる俗諺で、冬至を盛大に

祝うため、元日の儀礼が粗末になるという意味である。履長―冬至のことである。

*22 民間では灶かまどをお祀りする―十二月二十四日に竈を祀ることについては、『東京夢華録』卷十「十二月」・『夢梁録』卷六「十二月」・『清嘉録』卷十二「念四夜送竈」に見える。仙朮湯カウセン―仙朮は薬草おけらのこと。キク科の多年草。根は健胃薬。正月用の屠蘇散とし、また蚊遣りに用いる。

*23 粗盆こぼん―杭州において大晦日に松明を燃やす行事の壮観については、高濂著『四時幽賞』に活写されている（拙訳参照、「松盆」と称される）。ただし、『清嘉録』卷十二「焼松盆」にも同様の行事が記されていることから、これが杭州独自の行事ではないことがわかる。なおその訳注によれば、この行事の意図は、「火の力によって陽気を導き春暖を起さんとするもの」で、すでに五代の『四時纂要』に見られるという。